

この日の食事は一日二回、朝十時と徴用工員の人たちが外の作業から帰ってきたあと五時であった。

食べさせられたものは片栗粉のうどんのようなうどんといふものだった。元はといえば、うどん類は徴用工員が日本から持ってきていたもので、米軍に分捕られたものだった。この食事でも米軍はわれわれ主戦闘員を恐がって、徴用工員に運ばせた。

うどん類ばかり当分続いて、飽きあきしてきたが、しかし、食べ物を探してジャングルをさまよい歩くよりはずっとましだった。

暫くするとわが軍の飛行機が、夜中の二時、三時ごろ空襲にやってくることも多くなつた。

ラバウル基地から飛んでくるものと思われた。

收容所の米兵はテントで簡易ベットに真裸で寝ていて、日本の飛行機に急襲されると、アウを食って、服も着ないで外へ飛び出してきた。

自分たちも友軍機の空襲の危険にさらされながら、それを見ていてアメ公がフルチンでまた飛び出してきやがったと、口汚く罵っては、溜飲を下げていた。

日本軍の空からの空襲が頻繁になると、收容所の米兵たちは日本軍が近く上陸してくるのではないかと浮き足立っているように見えた。

そんな状況下で、捕虜の日本兵がいたのでは何が起るかわからないと思つたらしい。物資を運んできた三千トンぐらいの特務艦に急遽、われわれ捕虜全員が乗せられ、艦はスピードを早めて南下して行った。母国はますます遠くなつてゆく。

## ニュージーランド護送

何日かたつて補給に寄港したところはユーカレドニア島ではなかったかと思う。

船に乗せられたほとんどの者は、負傷やクマリヤ、栄養失調などで弱っている者はばかりだった。

運ばれていく船の船倉に入れられ、梯子をはずされたわれわれの楽しみといえば、船員

にねだつて貰つた煙草を皆でまわしのみするくらいであつた。とつてもマッチがなければ吸えなかつた。米軍のマッチは靴の裏や壁にこすつて点火させるので、煙草をのむたびに船員に一本船倉の上から投げてもらわなければならなかつた。

体は弱つてゐるものの、退屈しすぎに考えたことは、煙草の火種をいつも手許にとつておく方法だつた。タオルの糸を何本も引きだし、紐状によつて、この先に火を点け消さないように交替で持ち歩いた。消えそうになると紐の先を振り回して火を起した。

この紐が燃える臭いに階上の米兵が気付き、なにか下でくすぶつてゐると勘違いして梯子を下ろして調べにきたことがある。

米兵は武器を持って降りると多勢に無勢、逆に武器をとられて脅されかねない。用心に用心をして武器を持たずに降りてきて調べ始めた。火種を持つ当人は、調べながら移動して行く兵隊の後ろへうしろへとまわる。周りもそれに協力しついに見つからず終いになつた。こんなことも、敵の裏をかいたほんの一時のなぐさめで、皆で笑いあつた。

非戦闘員は、船内作業で、例えばトイレの掃除などをさせらるゝことがあつた。敵さんも真面目に作業をする人間を覚えていて、その人間を指名してゝくることが多かつた。

作業をした者にキャラメル数粒とか、おやつ程度の食べ物をくれることがあつた。誰もが空腹でゐるため、いやな作業もこんどは俺がいくという者もいた。だがそういう者にかぎつて作業中なにかをちよろまかしてきた。しかし、万事におおまかな米兵にたまには見つかつて罰を受けることもあつた。

あるとき業務用の大型みかんの缶詰を盗んで見つかつた者がいた。日本なら半殺しの目にあつてゐるのだが、むこつこの罰は盗んだ大型缶を目の前で開け、いますぐぐこで全部食べろといつものだつた。決して殴る蹴るをしないで、無理やり「ハリーハリー」と急ぎ立てて食べさせるのだ。罰を受ける者は、その量の多さを苦しくなり、かならず全部吐いてしまつた。罰を受けたあとのわれわれの報復は幼稚だつた。船倉のまわりに張り巡らされてゐる船内電話線を切つて、敵が困るのを喜んだりする、たわいないいたすら程度だつた。